少年の居住区にはガラスの鳥籠があった。

大人たちの話によると四半世紀も前に閉鎖された植物園らしい。

何故閉鎖されたのか、詳しい経緯は不明だ。

自宅にいながらにしてホログラムの動植物の閲覧できるとあれば、維持費ばかり嵩む植物園から人の足が遠のくのは世の習いか。

でも、いつからだろう。

その植物園にこんな噂が立ち始めたのは。

あそこには幽霊が出る。

未練を残した魂が彷徨っている。

あれは亡霊の鳥篭、虚ろな魂を現世に繋ぎとめておく硝子の檻。

だからあの巨大な鳥篭には近付くな、お前の魂まで囚われてしまうぞ。

おどろおどろしい噂は大人から子供へ、子供から子供へと引き継がれ伝染し、迷信深い人々の心の隙間に潜りこんで不安の種を芽吹かせた。

大人は子供に「あの植物園は朽ちて危険だから決して立ち入るな」と警告し、子供たちは「あの植物園には幽霊がでるらしい」「いや、人食いお化けだろ」「入ったら呪われるぞ、祟られるぞ」と目を輝かせ噂しあった。

実際、行動派として定評ある一部の子供たちが監視の目をかいくぐって潜入を試みており、翌日登校してきた彼らは確かに白い霧状の人影を見たと語った。

しかし、真偽のほどは誰にも分からない。

『第3衛星カシオペイア12区立植物園』

錆びた門の向こう側に見え隠れする半透明の丸天井が、少年の目指す場所だった。

少年は枝葉の頂点に覗く丸天井を門越しに睨んでいたが、やがて覚悟を決めて行動を開始する。

腰に力をため、堅牢な門を両手で引っ張る。

ギイイという鉄の歯軋りが耳朶を擦る。

ガチャン。

門の外れる音はギロチンが落ちる音に似ていた。

外れてしまった。なんてことだ。

少年は安堵と不安が綯い交ぜになった複雑な思いを胸に秘め、おそるおそる植物園の敷地へ足を踏み入れた。

門の向こう側は見渡す限り雑草の無法地帯と化していた。
真夏の日に後押しされた雑草がその勢力を拡大し、野生の蛇イチゴがあちこちに群生している。
草いきれに巻かれて窒息しかけた少年は、何かに躓いて派手に転んだ。
膝の痛みを堪えて起き上がった少年は、自分が転んだ地点に目を落として絶句する。
大蛇の腹のように地表でのたくる巨木の根。
弾かれたように頭上を見上げた少年は、人工の空を圧して聳える巨木の威容に息を呑む。
迷路みたいだ。
迷ったら出てこれないんじゃないか。
音たてて生唾を飲み、枝葉を薙ぎ払ってがむしゃらに突き進む。
一刻も早く緑の迷宮から抜け出したい、方向感覚を狂わす樹海から抜け出したい。
草を踏み分け小枝を叩き、光を掴もうと前へ前へと手を伸ばす。
そして――…
「わっ!?」
緑の洪水を抜けるや、たたらを踏んで立ち止まる。
明るい空間に放り出された少年は目を瞬き、恐る恐るその建造物に歩み寄った。
開閉式の天井を備えた温室は噂通り、草に埋もれた鳥篭を彷彿とさせる。
温室の壁は蔦で覆われ、出入り口を捜すのも一苦労だった。
少年は唾を呑み下し、汗ばんだ手で真鍮の取っ手を捻る。
未知の扉の先は鬱蒼とした密林だった。
熱帯の植物が咲き乱れ、極彩色の花々が濃厚な香りを放っている。
自分の胴より太い木の幹には螺旋状に蔦が絡み、透過ドームの天井へ梯子のように伸びている。
少年は人の姿がないことを確かめると、扉の間からそろりと最初の一歩を踏み入れた。
何も起こらない。
背後で扉が閉じる。
油断なくあたりに目を配り、広々とした温室を見て回る。
鳥篭の中は常夏の楽園だった。
情熱的なハイビスカスの赤、想像力を刺激する奔放なストレチア、サフランの官能的な紫。
原色の花々に取り巻かれた少年は、ホロアバターの図鑑をもってこなかったことを心底悔やむ。
ふいに鼻先を小さな影が過る。
青い残像を追って右斜め上方を見上げた少年は目をまん丸

くして驚く。
「……蝶？」
温室に蝶がいた。
今まで見たこともない種類の蝶だ。
二対の翅はセロハンを細工したように薄く、その色は夏の宵を染め抜いたように青い。
少年の掌とほぼ同寸大の青い蝶は、翅を優美にはためかせ、温室の天井高く昇っていった。

「地球蝶じゃよ」
無防備に立ち尽くす背をしわがれた声が叩く。
稲妻に打たれたように振り返れば、一人の老人が立っていた。
清潔な白いシャツを身に付け、サスペンダーで吊ったベージュのスラックスを履いた老紳士だ。
『ばれた』
脳裏で警鐘が鳴る。
はやく逃げなければ。
腰が引け気味にあとじさる少年に対し、老人は温和な笑みを絶やすことなく語りかける。
「あの蝶は外では生きていけぬのじゃ」
老人の謎めいた呟きを聞きとがめ、好奇心が恐怖を上回った少年は用心深く質問する。
「……あの蝶、どこ原産？」
少年が住む衛星は惑星管理局によって気候が維持されている。
春になれば草木が芽吹き、夏になれば日照時間が長くなるが、それらすべては地球の環境を模して造られた擬似的な現象だ。
透明な殻で覆われた空が青いのは、惑星管理局がオゾンを配合した光線を放射しているからだ。
今は八月、夏休み。
人工の空からは強い陽射しが降り注ぎ、植物の生育を助ける。
少年が住む衛星は、遠い昔に滅んだ地球と全く同じ気候に保たれていた。
それなのにあの蝶は、温室の外では生きていけないという。
少年は首を傾げた。
「地球じゃよ」
「だって、地球はもうとっくに……」
少年は語気を強めて反問したが、老人の目を見て言葉を呑む。
地球蝶を見上げる老人の目は深い哀しみに満ちていた。

釈然としない顔で老人の目線を辿る。
ガラスの天井からは緩和された陽射しが梳いた絹糸のように降り注ぎ、それを浴びて蝶の群れが乱れ飛ぶ。
「とっくに忘れられた星じゃ」
ひとたび振り向けば、老人は親しみやすい好々爺に戻っていた。
「君はなぜ、ここにいるのかね？」
「え」
唐突に問われ、少年は脳天から間抜けな声を発する。
「通報したりはしないから安心なさい。不法侵入してるのはワシも一緒じゃ」
そういえばそうだ。
制服も着てないし警備員には見えない。
一般人の不法侵入だとすれば、規則を破っているのは目の前の老人も一緒だ。
少年は胸をなでおろしたが、その安堵はすぐに一抹の疑問に取って代わる。
「おじいさんはなんでここにいるの？」
「なんで、とな？」
「ここは立ち入り禁止のはずでしょ。規則を破ってまでなにしにきたの？」
「散歩じゃよ」
「門は閉まってたよ。どうしたの？　乗り越えたの？　おじいさんなのにすごい元気」
老人は後ろ手を組んで温室を徘徊、飄々とした口調で付け加える。
「ここははワシの庭みたいなもんじゃ。ワシは植物が好きで、この植物園が開園した当初から、毎日通い詰めていたのじゃよ。閉鎖されてからも毎日な」
「毎日……」
このおじいさん、とんだ物好きだ。
「君、植物は好きかね？」
どうやた悪人ではなさそうだ。
警戒を解いた少年は、ハイビスカスを一瞥して素っ気なく答える。
「それなりに。父さんが植物学者だから」
「それでは、その花の名前を知っているかい？」
「プルモナリア。あたりまえだろ？」
「『気品』」
老人がニヤリとする。
「プルモナリアの花言葉じゃよ。さすがに知らんかったじゃろう」
馬鹿にされたとカチンとくる。
憤然と踵を返し、老人と離れて逆方向に歩き出す。

温室を大きく迂回し、色鮮やかな熱帯の花々を目の端で鑑賞する。
特殊な材質でできた温室はガラスの鳥篭のようだ。しかし、この鳥篭が閉じ込めているのは鳥ではない。
蝶だ。
温室では無数の蝶が飼われていた。
蝶たちは花から花へと移ろって蜜を吸い、人造池の水面に影を投じていた。　天井からは蔓が垂れ、周路にはソテツの木が植わっている。
外とは別世界だ。
「噂は嘘だったんだ」
「嘘？」
「植物園に幽霊が出るって噂」
「ここは気に入ったかね？」
ソテツに絡む蔓を引っ張りながらぶっきらぼうに頷く少年。
「明日もくるかね？」
予想外の展開続きだが、老人の問いで少年はここで過ごす時間を楽しみ始めている自分に気付いた。
青い蝶が舞い飛ぶ硝子の天井とそこらじゅうに生い茂った極彩色の花々を見比べ、幼い優越感に酔い痴れる。
こんなすごい光景、同級生は知るはずない。
「うん、明日もくる」

少年の返事を聞いて、老人はさも嬉しそうに顔を綻ばせた。